

ユーザーID 管理の効率的かつ厳格な 運用の実現に向けた研究 —できてます？どこまでやるの？ID 管理—

アブストラクト

1. 背景・問題意識

企業の情報システムを取り巻く環境は、全世界に広がる顧客へのサービス提供、従業員のワークスタイルの変化、クラウドサービスの台頭などの要因により、利用者の増加・利用形態の多様化によりデータ保管場所の分散化が進み、情報漏えいのリスクが増している。

企業における情報漏えい事件／事故の発生は、被害者への補償や救済措置などへの金銭的損害に留まらず、企業ブランドの失墜による利益縮小までも引き起こし、経営価値の毀損に繋がるため情報漏えいのリスクへの対応を十分に行う必要がある。情報漏えい対策の1つとして、情報システムのユーザーIDを厳格に管理することは有効である。

本分科会の参加企業を対象に、各企業が抱える問題意識を調査した結果、ユーザーID 管理には多種多様な課題を抱えていることが判明した。調査から得られた問題意識を整理・集約し「運用」、「認証」、「プロセス」、「利便性」、「利用環境」の5つに分類した。

2. 課題の設定

前章で調査した問題意識の原因がどこにあるかを探るため、5つの分類ごとにユーザーID 管理の実施すべきポイントを洗い出し、更なる調査を実施した結果、5つの分類についてバランスよく対応できている企業はないことが明らかとなった。

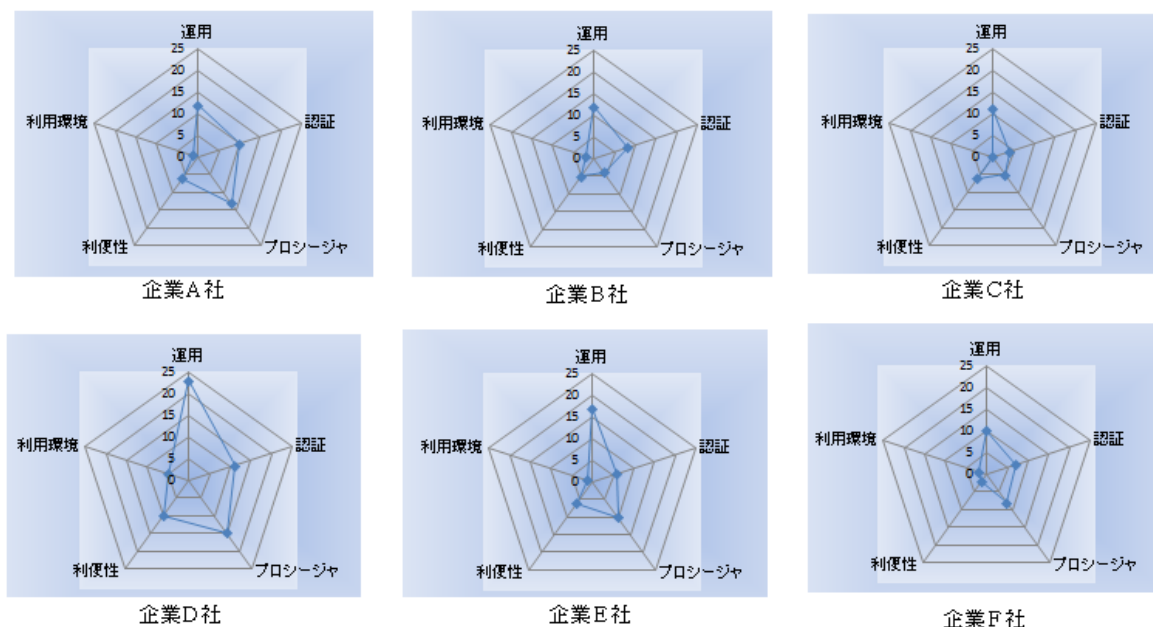


図1 企業毎の集計グラフ

ユーザーID 管理の全体を考慮した計画的な対応ではなく、企業がユーザーID 管理について、局所的な対応を積み重ねた結果が不均衡な状況をもたらしていると言える。本分科会は、「企業のユーザーID 管理に関する不均衡な状況を計画的に改善すること」を課題として設定する。

3. 解決策の検討

前章で設定した課題の解決に向けては、成熟度モデルを活用したユーザーID 管理の評価を実施することが有効であると考えた。成熟度モデルは成熟度を評価する指標として、「現在の成熟度レベル」と「次に目指すべき成熟度レベル」を示すことが可能であり「次に目指すべき成熟度レベルに到達するための施策」についても示すことが可能である。本分科会で『ユーザーID 管理に関する成熟度モデル』として、企業が自社のID 管理の状況を分析し、計画的にユーザーID 管理を改善する為のフレームワークを作成した。ID 管理の成熟度モデルは「ユーザーID 種別」、「業務カテゴリ」、「成熟度レベル」、「管理策」という4層から成る階層構造に整理した。ユーザーID は特権ID と一般ID に分け、業務カテゴリは、前章で洗い出した問題意識の5つの分類を、実際の業務に当てはめ「共有ID 管理」、「登録改廃管理」、「棚卸」、「パスワード管理」、「監査」の5つに再分類した。成熟度については、経済産業省が公表している『情報セキュリティ管理基準』に示されている管理策の内ユーザーID 管理に関わる要件を用いて達成度合いを評価できるようにした。

		成熟度				
		レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
特権ID	共有ID管理	管理策				
	登録改廃管理					
	棚卸					
	パスワード管理					
	監査					
一般ID	共有ID管理					
	登録改廃管理					
	棚卸					
	パスワード管理					
	監査					

図2 『ユーザーID 管理に関する成熟度モデル』の概念

また、各管理策を詳細に分類して成熟度を把握する前に、包括的に成熟度を把握するための『ID 管理成熟度判定ツール』を開発した。このツールを利用することで自社のおおよその成熟度レベルを知り、そのレベルで実施できてない管理策に対し、高い優先度をつけることで、効率的に改善を図ることができる。

4. 効果の検証／まとめと提言

参加企業の中で、ユーザーID 管理を実施している実務者に協力頂き『ID 管理成熟度判定ツール』の有用性を検証した。「課題を認識できた」という回答が大多数であった。「特権ID 管理が課題であることを認識できた」という意見が特に目立つ結果となった。一方、「課題が大きいためどのように改善していけばよいかヒントになるような例が欲しい」との意見があった。これについては、『ID 管理成熟度判定ツール』の結果を踏まえて、『ユーザーID 管理に関する成熟度モデル』に示されている個別の管理策を参考にすることで、改善につながられる。

検証及びアンケートの結果から、改善ポイントはあるものの、『ID 管理成熟度判定ツール』は、ユーザーID 管理の課題認識と次に取るべき施策を把握でき有用であることを確認した。

本分科会では、多くの企業でユーザーID 管理に不均衡な状況をもたらしている原因は、局所的な対応を積み重ねた結果だと分析し、企業のユーザーID 管理に関する不均衡な状況を、計画的に改善することを課題として解決策を導いた。

本分科会の成果物である『ユーザーID 管理に関する成熟度モデル』及び『ID 管理成熟度判定ツール』を利用することで、企業はユーザーID 管理に関する成熟度レベルを知ることができ、何が不足し、何を目指し、何をすべきかを確認可能となる。結果、最短距離で効率的に「今後目指すべき成熟度レベル」へ到達できると言える。

アンケートにおいても、「課題を認識できた」等の意見を頂いていることから、ユーザーID 管理の課題を解決するための指針として有効な研究であると評価する。